

# 石割り ちゆうべ えやぶ おおにゆうどう 石割と忠兵衛藪の大入道 (宮脇)

宮脇から須磨田へ行く道がある。その道に沿って、石を切り出す石割場と、そのそばに忠兵衛藪がある。

このあたりでは、満月になると大入道が出てくるといふ。みんなは恐れて、満月になると近づかないようにしていた。

この話を聞いた大工の棟梁が、

「そんなことあるものか。どうせ、狸か狐の仕業だろう。

ようし、わしが一つ試してみよう。」

と言って、満月がくるのを待っていた。

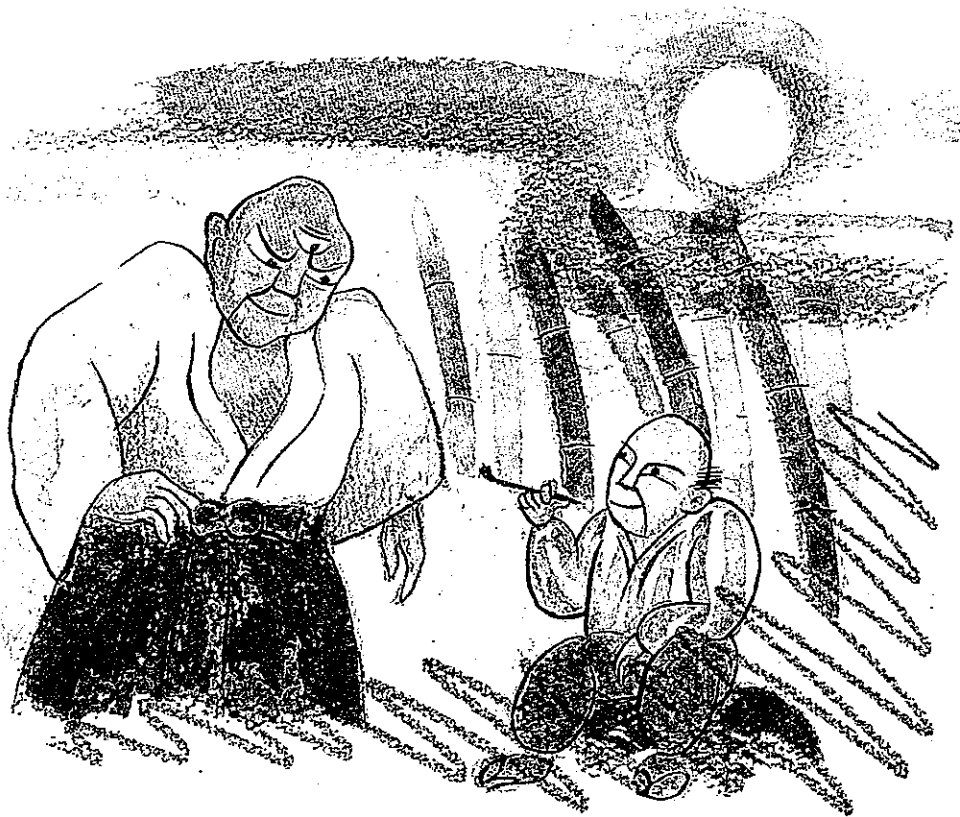
ある家の棟上げの日、お祝いのご馳走やお酒をよばれ、よい気持ちになって家路についた。ふと空を見上げると満月が煌々とあたりを照らしていた。

棟梁は、

「よい満月じゃ。ひよつとすると今夜は大入道が出るかもしれないぞ。」

と身構えた。

石割場のところまでくると、忠兵衛藪の太い竹がガサガ



サとゆれて、三つ目の大入道が出てきた。

「やい、わしは忠兵衛藪の大入道だ。どうだ、こわいか。」  
と言った。

「ふん、お前さんがあの大入道か。」

と棟梁は言つて、大きな割石の上に腰かけて、長いキセルを取りだした。

きざみたばこをキセルに詰めて、火打ち石でケン、ケン、ケチンと火をつけ、さも、うまそうにスーパスーパ、スーパスーパと、ゆっくりりと吸つた。

そして、

「大入道さんよ、おまえさんも吸うか。」

とおもむろにキセルを差しだした。

大入道は、

「いやいや、たばこは大の苦手じゃ。煙を吸うだけで力がぬけるのじゃ。」

と言った。

棟梁は「いいことを聞いた」と思った。

「それで、おまえさんは身の丈はいくらじゃ。見たところ、七尺七寸(約二メートル三〇センチ)ぐらいかのう。」

「おう、その通りじゃ。だがな、もつと大きくなれるん

じゃ。しかし、あんまり大きくなりすぎると化ける力がなくなる。」

「大入道さんよ、その大きくなれるというすごい力、ぜひ見せてくれんかのう。この目で見んと信じられん。」

と棟梁が言うと、大入道は得意気になつて、背丈を九尺九寸(約二メートル七〇センチ)まで、せいっぱい伸びてみせた。ここぞとばかりに棟梁は、口いっぱい吸つたたばこの煙をブワーと吹きつけた。

大入道はたまらない。ボワボワボワツとしぼんで、みるみるうちにもとの古狸にもどつてしまった。

すかさず棟梁、金づちを箱から出して、狸めがけて投げつけた。狸はたまらんとばかりに一目散に忠兵衛藪の中へ逃げこんだ。

それからというもの、だれが通つても大入道は出なくなつたとさ。

とつぴんしゃん。